失われゆく地域性

先日、安東（アンドン）を旅した時にお世話になった釜山の高校の校長先生が修学旅行で来県された。

交流している徳佐高校を訪問されると聞いて出向いた時のことである。

徳佐高校の生徒は三年生と二年生。一年生は山口高校徳佐分校の生徒になっていることを初めて知った。

つまり二年後には徳佐高校の名前はなくなり、山口高校徳佐分校になるというのだ。

一瞬、平成の大合併で徳佐高校のある阿東町は山口市と合併したのかと思った。

山口市と合併したのは小郡、阿知須、秋穂、徳地の四町で、阿東町はそのまま。なぜ徳佐高校は山口高校の分校になるのだろうか。

調べてみると、もともと阿東町は山口市と関係が深く、県の行政区でも山口市などと同じ広域市町村圏に入っている。分校化されるのなら、その中でもレベルが高いといわれる山口高校の分校にということらしい。

徳佐高校の卒業生には寂しい話だろうが、少子化時代、さらに農村の過疎化が進んでいるとあっては分校化も時代の流れかもしれない。

また市町村合併も人口の都市への集中、農村部の過疎化、さらに首長や議員を削減し、経費を押さえるために仕方がないことかもしれない。

しかし、これは日本だけのことではない。

退渓が後進を育てた陶山書院

今回訪れた韓国も同様で、一九九五年に大規模な市町村合併が進められた。

訪れた安東市も旧安東市と周辺の郡が合併して現在の安東市が誕生した。その結果、現在の安東市は人口十九万人、韓国の「市」で最も面積が広く、一五一八平方キロ。下松市の十七倍の広さである。

安東市はガイドブックには儒教の総本山、伝統的な古い家屋で人々が生活し、昔ながらの韓国を感じさせてくれるとある。

しかし市街地から遠く離れた河回村（ハフェマウル）や、十六世紀に活躍した儒学者・李退渓（イテゲ）の建てた陶山（トサン）書院などごく一部以外は都市化された街や家屋である。

本当の地域性は失われ、グローバル化される中、観光地だけがその地域の伝統・文化を伝える傾向は安東に限ったことではない。

金さえあれば何でも手に入る、便利な都市に人々が集中する。しかし都会の多くでは自然は破壊され、土の香りはなく、人が造ったものばかり。それが本当の豊かさなのだろうか。

不便でも、それぞれの地域の特性を大切にする生活、作る喜びの中から自然にものを大切にする生活こそが豊かさであろう。

後遺症で左手足が不自由な妻から、野イチゴのジャムやフキの佃煮を作り、ケーキを焼く喜びを学ぶ。

狭い庭で花を愛で、小さな箱の野菜畑で自然を感じる日々の中にも豊かさはあると思うのである。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

門だけが昔の面影を残す　安東の中心街